

IATSS三十周年によせて

IATSS三十周年に寄せる思い

石附 弘 国際交通安全学会専務理事

1969年一橋大学法学部卒、警察庁入庁。石川・福岡・兵庫の各県警課長、在韓日本大使館書記官、内閣官房長官(後藤田・小淵両長官)秘書官、警察庁捜査二課長、暴力団対策一課長、長崎県警察本部長、防衛庁審議官等を経て、現在、当学会専務理事、警察政策学会理事、日本市民安全学会会長。



越し方30年、国際交通安全学会創業の志を育みこれを支えてきた先達の熱き思いが脈々と息づく中で、今、私は仕事をさせていただいている。そのことを私は誇りに思い、日々幸せを感じている。またこの機会に、関係の諸機関、諸団体の深いご理解と暖かいご支援、ご協力に心から感謝の意を表したい。

ブラッセルの自動車博物館で人類の偉大なる発明品自動車の歴史を目にした時、私は、初期の設計思想が「馬車モデル」であったことを知った。これを現代の「自動車モデル」に発展させ自動車は20世紀を席卷した。今、自動車は時速300kmをも現実のものとした。この速度は飛行機の離陸速度といわれるが、21世紀の自動車はついに2次元から3次元の「飛行機の設計思想」の門前まで到達したことになる。自動車には、確かに総合芸術的要素を持った世界がある。魅力があり、夢があり、面白いから発展する。

国際交通安全学会は、30年前、自動車社会が生み出した「負の遺産」や「安全」をめぐる諸問題との闘いから始まった。各界の英知により問題を直視し、学際的手法でスポットライトとメスを当てて、交通安全に関する幾多の戦略と処方箋が学会から情報発信された。

我々のテーマである「安全」の問題を時間軸でみると、事件・事故・災害等の危険を「運」が悪かったとあきらめていた時代から、危険源を個別的回避・管理する時代を経て、今はその原因背景・メカニズムを総合的に分析し、危険源を社会システムとして未然防止する包括的リスク・マネジメントの時代に移りつつある。自殺やいじめ対策、犯罪対策においてもこの考え方が社会モデル化しつつある。事件・事故・災害等の危険そのものをミニマム・コントロールする「予防的設計思想」である。ここでは「安全水準」の設定や評価・効果測定の方法論等が新しいテーマとして浮上する。スウェーデンのビジョン・ゼロ戦略などはその最右翼の社会実験といえよう。ブキャナンやジェイコブスなど先人の「先見性」、彼らの問題提起が現実問題となり、問題解決の手法(設計思想)として再評価されている。

ところでせっかくの「安全」文化を市民の生活空間にまで普及・浸透するためには、英の動物学者ワトソンの「生命潮流」(100匹目の猿)の例によるまでもなく、これまでになく新しい恩恵(ベネフィット)や夢を「安全」文化にとり入れてこれを面白くする必要がある。もっと面白くなれば人は放っておいても「安全」を身につける。ミスをする人間の特性を踏まえつつ、市民生活の空間の中に魅力的で楽しい「安全」の仕掛けを家庭や近隣、社会の中に散りばめることが、事件・事故・災害等の危険から解放される必要条件となってきた。かかる観点からは、ドイツにおける子どもたちへの「Move it 学習」「第七感キャンペーン」、英の「Thinkキャンペーン」の「安全」文化の戦略性が注目される。

どうすれば「安全」文化を、自動車のようにもっと魅力的で楽しい世界にできるか。こんな話題を学会のサロン文化の中で熟成させていただければと思う今日この頃である。